

西南学院小学校 学校長メッセージ

「学校通信 Wings 2021年6月号」

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。

コロサイの信徒への手紙3 3章23節

6月に入りました。既に梅雨入りとなって半月がたっています。温暖化のせいか、季節の変化と暦とが次第に合わなくなってきたような気がします。皆さまいかがお過ごしでしょうか。

緊急事態宣言の発出により、無観客で学年別の実施となったスポーツフェスティバルでしたが、28日に無事に実施することができました。どの学年も2種目でしたが、子どもたちは練習の成果を発揮してはつらつとした演技を見せてくれました。保護者の皆さまのご理解とご協力に心より感謝いたします。編集が出来次第、配信いたしますので楽しみにお待ちください。

今年のスポーツフェスティバルは全体練習も応援団もなく、通常のとくとは比べようもありませんでしたが、それでも、クラスや時には学年の枠を超えて協力し、練習に取り組む子どもたちや先生たちの姿を見ると、目標に向かって力をあわせていくことの大切を改めて感じました。子どもたちが成長していくためには、日々積み重ねていく学習はもちろんのことですが、このような行事も「節目の学習」として、必要なことだと痛感します。コロナ禍で行事がなくなり、学校教育が痩せ細ってしまうことは何とも残念です。無理せず工夫しながら、日々の学習と節目の学習の両立を図っていきたいと思います。

ところで、5月のチャペルでこんな話をしました。

アメリカの首都ワシントンにある地下鉄の駅で、普段着に野球帽をかぶったごく普通の男性が、バイオリンの演奏を始めました。約45分間の演奏の間に千人以上の方が通り過ぎましたが、前に置いたケースにお金を入れていった人は28人、立ち止まって演奏を聞いたのは8人に過ぎませんでした。入れられたお金は合わせて約32ドル、一人当たりになると1ドルちょっとでした。

実はこの男性は世界的に有名なバイオリニストで、前日行ったコンサートの入場料が一番安い席でも100ドル以上しましたが、チケットは完売。しかも使ったバイオリンは3億円以上もするというストラディバリウス。曲目もコンサートで演奏したモーツァルトやバッハなど有名な曲ばかりでした。

このコンサート、実は新聞社が企画したもので「服装や環境が悪くても、本物のよさは分かるのか」という実験をしたものでした。

このエピソードは、私たちがいかに思い込み(固定概念)にとらわれやすいかということを改めて実証していると思います。

子どもたちには、名演奏に限らず、私たちはよいことや大切なこと、真実に気付かずにいることがあるのではないだろうか。できるだけ注意深くありたい。何でも当たり前とってしまったら気付くのは難しいだろう。もし毎日の生活の中で当たり前と思っていることが、実はとても恵まれたことなのだとことに気づき、感謝することができたら、きっと私たちはより豊かな気持ちで生活することができるのではないだろうか。神様のいう豊かさとはそういうことではないだろうか。

ということを話しました。私自身チャペルの原稿を作りながら、改めて自分を振り返る姿勢(謙虚さ)をもつことの大切さ(同時に難しさも!)を感じました。

人はそれぞれに「正義」をもっており、必ずしも同じではありません。よかれと思ってやったことが時としてよい結果をもたらさないことがあるのは、そして場合によっては悲惨な結果を招いてしまうこともあるのは、自分は正しいという思い込み(固定概念)にとらわれて、相手の正義(気持ち)も大事にしようとする冷静さや謙虚さを忘れてしまっているから、ということがあるのではないのでしょうか。考えてみれば、戦争も互いの正義と正義のぶつかりあいではなかったのかと思います。

コロナ禍が続く、ついつい心もささくれだっけとしまいがちですが、そうした中でもきっと与えられているに違いない恵みに気付くことができるよう、日々注意深くありたいと思います。